『よみがえりの主』 (ヨハネの福音書 11 章 17-32 節)2020.11.1.召天者記念礼拝

＜はじめに＞ 「召天者」という言葉をどう捉えるのかは様々です。今日は、地上生涯を終えられたお互いの近親者をそれぞれが思い起こしつつ、私たちが受け継いでいるいのちの流れに目を留め、またやがて私たちにも訪れる死について、イエスの物語から共に思い巡らす時です。

Ⅰ　遠ざけたい、遠ざけ難い(17-22)

①イエスが見た光景

イエスがベタニヤに来られた時、既にラザロは墓に葬られて 4 日が経っていました(17)。ラザロはマルタ・マリアの兄弟です。彼女らの許に弔い客も大勢集まっているところに、イエス到着の知らせが入り、マルタは出迎えに行き、マリアは家で座っていました(19)。

②死ななかったでしょうに（21、32）

イエスが居られたなら、ラザロも癒されて死ななかった、と姉妹は開口一番に言います。裏返せば、死の現実はイエスにもどうすることもできない、とも取れます。マルタが続けた信頼のことば(22)から、主が間に合わなかった無念さを悲しんでいることが分かります。

③厳粛な死の事実

死は絶対的で不可逆なブラックホールのように私たちの行く手に立ち塞がります。そこに誰もが吸い込まれて行きます。私たちのささやかな願いは、死を避けたい、少しでも遠ざけようと、為し得る限りのことをします。それでも、厳粛なその日はやがて必ず訪れます。

Ⅱ　イエスのことば(23-27)

①「あなたの兄弟はよみがえります」(23-24)

このイエスのことばは衝撃です。肉体の死が終わりではなく、死の後に続く別のいのちがあると明言されます。それがいつ、どのような形で実現するのでしょうか。マルタは、終わりの日がよみがえりの時だと捉えました。終わりの日は、新しい始まりでもあります。

②「わたしはよみがえりです」(25)

よみがえりは死が前提にあります。肉体の死は袋小路ではなく、新しいいのちが現れる舞台です。事実、イエスは十字架で死なれた後、3 日目によみがえられました。それは元に戻るのではありません。神の御前で生きる永遠のいのちが輝き現れることです。

③「永遠に死ぬことがありません」（26）

いのちは二つあります。一つは肉体の命で、もう一つは永遠のいのちです(→ヨハネ 17:3)。「決して死ぬことはない」のは永遠のいのちであって、肉体にあって生きていてイエスを信じる者には必ず与えられると約束されています。「あなたは、このことを信じますか。」

Ⅲ　信じる者に与えられる(25-27)

①イエスとはどんな方か

「わたしを信じる者」とイエスは言われました。イエスが如何なる方だから、私たちは信じているのでしょうか。この問い掛けは繰り返され、答えは更新され続けるものです。聖書から答えを見出すとともに、主との交わりから得た今日の答えを主は待っておられます。

②はい、主よ。信じております(27)

マルタは明解にイエスが神の子キリストであると信仰を告白しました。主はそれを受け取り、その信仰をより具体的に表すようにと育て導かれます(39-40)。信じるとはポジションではなく主との関係です。毎瞬更新され、深められていくことを主は望んでおられます。

③ゆだねよう

主イエスへの信仰が今どうなっているかは、人の目には明白にわかりません。そう見えないときにも、やはり主を信じるのです。主の愛とあわれみは絶大で、私たちの不十分・失敗・無力を越えて働くものです。その主に自分も愛する者もゆだねることができます。

＜おわりに＞ 「わたしに従った者」ではなく、「わたしを信じる者」は死んでも生きるのです、と言われたイエスに目を留めましょう。私たち人間側の力やわざではなく、どこまでもイエスへの信仰を主は私たちに求められていることです。(H.M.)